昭和の南海地震体験談

氏　　名：松本　澄子（まつもと　すみこ）
生年月日：大正１１年7月１日
地震を体験した場所：由良町・自宅寝室
当時の家族状況：夫、義母、

１）地震発生時の状況

当時２４歳で、結婚して３０日目だった。自宅寝室で就寝中に、突然突き上げるような強い揺れがあり、目を覚ました。縦揺れで時間は一瞬のようだった。すぐに夫が雨戸を開けて外を見ると、由良川の方に空から下に赤い火柱が見えた。実家が近くにあった為、夫から実家に帰れと言われ、寝巻きの上に着物を着て、１人外に出ると、近所の人達に「お宮さんに行こう」と言われたので一緒に行くことにした。

２）津波襲来時の状況

自宅前の通りを誰かが「津波やぞー！早く逃げよよー！」と叫んで走ってくれていた。近所の人達と避難する頃には、既にすねまで水が来ていた。自宅周りは埋め立て地で砂地の為か、砂の混じったようなシャラシャラという音がして波が来ていた。神社の本殿に上がり、焚き火に当たり暖を取った。境内は横浜地区の避難者でいっぱいだった。地震の後には津波が来るということは話に聞いていた。

３）家族の行動・被害

夫は義母を親戚の家に避難させた。津波が収まったのは夜が明け、明るくなった頃だった。避難場所の神社の境内から階段を降り、神社近くの実家の様子を見に行ったところ、家族は津波を知らなかった。地震で目を覚ましたが、何も被害がなかったので、もう一度寝たらしい。

午前7時頃に自宅に戻ると、床上１m程度の所まで濡れた跡があった。そのままにしていた布団は畳ごと浮き沈みしたらしく、濡れていなかった。

４）集落・周囲の被害

川向こうの新出川通りでは１１人が亡くなった。３歳くらいの子供をおんぶした父親が引き潮に流され子供が波にさらわれ、小路から遺体で見つかった等、避難の際、引き潮に流された人が多数だった。海沿いの漁師場や、海軍敷地内の戦争引き上げ者の仮設住宅が流され、住んでいた人が亡くなった。お寺には遺体が並べられていた。

ある女性は布団に寝たまま畳ごと流されたが、蟻島に辿り着いて助かった。近くの郵便局の前に釣り船が流れてきて、そのまま残ってしまった。

5）地震・津波後の生活

自宅の片付けをする間、被災しなかった実家で生活した。井戸替えや片付けをし、どうにか自宅に戻ったのは2ヶ月後だった。津波で流れてきて床に溜まった泥を鍬でかき寄せ、裏庭に穴を掘って埋める作業が1ヶ月も続き、自宅の片付けにかかりきりになり、仕事もできないくらい大変な労力を使った。それが堪えて、夫は1ヶ月ほど寝込んだ。

ちょうど結婚写真が出来上がった日の夜の事で、泥の中から写真が出てきた。綺麗に拭いて、大事にしている。写真屋のネガは流されてしまったから見つかって良かった。

6）次の災害への備え

同じ土地に住んでいるが、平屋から2階建てに建て替えた。壊れない限り、2階部分を取りあえずの避難場所にと考えている。避難生活の事も考え、高台にある実家の近くの土地を手に入れた。

地区ごとに避難場所は決まっているが、家族にわかる所在確認の方法等の話し合いをしている。持ち出し袋の用意はしていない。

天災は仕方のない事なので、常に冷静に対処し、慌てないこと。集団で行動することが大事だと思う。